
じいちゃんが飛んでった

柳 大知

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

じいちゃんが飛んでった

【Zマーク】

Z3725F

【作者名】

柳 大知

【あらすじ】

部活を終え山の中の家に帰ってきた中学生のユウタ。ほっと一息つく間もなく、聞こえてきた母の叫び声、「じいちゃんが飛んでった」

(ぼくのおじいちゃんは、すこにはつめいかです、おじいちゃんはなんでもつくれます、だからぼくはおじいちゃんがだいすきです。)そんな内容の作文を数年前に書いたことを今ではすっかり忘れている中学生のコウタは、部活に加え、灼熱の太陽の下の山道を自転車で上ってきたことで体が失った水分を取り戻すため、家の冷蔵庫から命の源であるキンキンに冷えた麦茶を取り出しグビグビと音を立てて飲んでいた。

そのとき、

「コウタ、じいちゃん飛んでつた！」

少し離れた庭で、母が大声で叫んだのだ。

普通の人がその言葉を聞いても訳がわからないだろうが、コウタにはその意味がすぐに理解できたので庭へ駆け出た。

「えっ！あれ蔵に封印したんじゃなかつたの？」

コウタは封印と言つたが、実際はじいちゃんがそれを手にできないように蔵に鍵をかけ、隠しただけのことだった。

「わからん、でも、蔵が開いとる」

おそらく、母が隠していた鍵をじいちゃんが見つけたのだろう。

「どつち行つた？」

そう聞くと、母は右上空に向かい指を突きあげた。

「あつ！あれや！」

遙か上空に、ポツリと人影のようなものが見える、この眼で、はつきりと、あれがじいちゃんだと確認するのは無理だが、パラシユートやパラグライダーで空にいる人と違つて、カラフルな物体や装置を伴わずにあんな風に空を飛ぶ人間は、じいちゃんに違ひなかつた。

「俺、行つてくる。」

コウタは、やつを降りたばかりの自転車に跨り、上空のじいちゃんを見ながら、その姿を追つた。

だが、じいちゃんは一体どこへ行くのかわからない。とうあえず、じこねやんの姿を見失わぬよう、何度も空を見上げながら走つた。

しばらくすると、上空のじいちゃんは急に移動するのを止めた、どうしたのだろ？と、コウタがじつと空を見上げていると、その姿がゆっくろと近づいてきて、だんだんと大きくなつてしまつた。（よかつた、降りてくる…）

だが、じいちゃんは目測を誤つたのか、コウタのいる場所から、少し離れた森の中に降りてつた。

コウタはそこへ向かいペダルをこいだ。

「じいちゃん！大丈夫か？」

コウタが問いかけると、森の中からヘルメットとスキー「ゴーグルをつけたじいちゃんが出てきた。

「おう！ケンタか！」

ケンタは父の名前だつた。

「違うよ、じいちゃん」

そういうと、じいちゃんはゴーグルをはずし、首にかけると、コウタの顔をまじまじと見た。

「おおおお！コウタか！」

よつやく念願したようだ。

「もひ、それは使つちやだめつて、畠つただろ」

そう言われた、じいちゃんは「うむ」と呴いただけで黙つてしまつた。

「それ、外して、俺にちょーだい」

それとは、じいちゃんが蔵から持ち出した。封印されていたヘルメットだつた。

じいちゃんは、渋々そのヘルメットを脱ぐとコウタに渡した。それを自転車の前かごに押し込み、じいちゃんを後ろに乗せ、

「俺の体、ちやんとつかんでなよ」

そつ言ひでコウタは家を田指し本田一回田の山上りをはじめた。

じいちゃんは昔、何かよくわからないけど「じい」装置を発明したりして、知る人ぞ知る発明家だつたらしい、だけど80歳を過ぎてボケが急激に進行して、最近では、残念なことに家族との会話すらあまり成立しなくなつていた。

そんなじいちゃんが、少し前のある日、突然（出来た）と叫んだかと思うと、大空に飛んでつた。

しばらくして帰つてきた、じいちゃんは、少し残念そうな顔をし、「まだ、だめだ」と呟いた。

じいちゃんが空から降りてきたのも驚きだつたが、そんなことより僕らが驚いたのは、空から帰つてきたじいちゃんが、ヘルメットとゴーグル以外何にも身に着けていなかつたことだ。そのとき、休みで家にいた父さんがじいちゃんに問いただすと、じいちゃんはヘルメットを被るだけで飛べると言つた。それは工事現場で働く人が被つているようなモノで、別にてつぱんに何とかポケットから出てきそうなタケトンボがついてるわけでも無く、いたつて普通のものだつた。

試しにヘルメットを父から順に被つてみたが家族の誰も1セセンチすら地面から足を浮かすことは出来なかつた。

じいちゃんは笑いながら言つた。

「秘密は誰にも教えないよ」

すぐに、父さんはヘルメットを知り合いの研究者に見せてまわつたが、誰に見せても、答えは何のへんてつも無いヘルメットで、こんなものだけで空が飛べるわけがないと、みなに笑われたそうだ。それで父さんは、じいちゃんに真相を何度も聞いたが、じいちゃんは決して答えなかつた。

しばらくして、家に都会の大企業から人が訪ねてきて、じいちゃん

と契約をしようとしたが、じいちゃんは金はないし、秘密は誰にも教えないの一点張りで、ついに粘る相手を諦めさせた。相当なお金が手に入つただろうに、何で？と思つた。でも、その秘密はじいちゃんにしか分からないので如何しようもなかつた。結局、危険だし、何が起こるかわからないので、ヘルメットをじいちゃんから取り上げ、蔵に封印した。

～～～

ユウタは自転車を降りていた。自転車のサドルには、ぼんやりしながら、じいちゃんが座つてゐる。ユウタはじいちゃんを背に抱え走り出しだが、じいちゃんの落下地点からほんの数メートル進んだところで、家に着く前にじいちゃんより先に自分が死ぬと感じて、じいちゃんを座らせ、その骨っぽい体を支えながら自転車を引いて歩いていた。

(すまんの、わしが歩ければ)

そんな汗を流してゐる孫の労をねぎらつような一言も発さず、じいちゃんは、ボーッと空を見つめていた。だが、しばらく進むと、じいちゃんは、うなだれるように首を下げると、ボソッと何かを呟いた。

「今日も…いけんかった…」

そういうえば、じいちゃんは何が田舎で空に飛び出したのだろうか？
いけんかつたつて…どこに？ ユウタは聞いてみた。

「じいちゃん、一体どこに行きたかったんだよ？」
じいちゃんは空を見上げ呟いた。

「あそこ、房江さんのと…」

それを聞いたユウタは思わず微笑まずにはいられなかつた。そしてじいちゃんに呟つた。

「何だ、じゃあ、何か思いついたら、俺に呟つてよ。蔵の鍵なら開けられるからや」

すると、じいちゃんはうれしそうに笑つた。

「せうか！ケンタも行きたいかー房江さんひ会つてー。」

「ええ、ボクはまだいいよ」

房江はボクの姫ちゃんの名前だった。

じこちゃんが行きたいといひせわかつてゐ、それと天国が空の上に
あるつて思つてゐるんだ。

ボクはまだまだ行きたくなつし、じこちゃんだつて空を飛ばなくて
も、いつかそこへ行けると思つ。

それでも、じこちゃんがまた飛びたいて言つたら付き合つてあげ
ようと思つ。

ただ、飛び回るのせりの三の周りだけつて約束してもいいね。

大丈夫だよな、

うへん、どうかなーまた名前間違えてるし…

(終)

(後書き)

6作目です

ひとつ前が、短編といいながら6千文字だったのでも、なるべく短いのをと思ったのですが、意外と長くなってしまった…

珍しくほのぼの系かも

(じいちゃんの秘密は自分にもわかりません…)

読んでいただきありがとうございます。
コメントしていただけると非常にうれしいです!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3725f/>

じいちゃんが飛んでった

2010年12月1日07時54分発行